

令和6年度 第2回 織田廣喜美術館運営協議会 会議録

1. 会 議 の 名 称: 令和6年度 第3回 織田廣喜美術館運営協議会

2. 開 催 日 時: 令和7年3月25日(火)10:00～

3. 開 催 場 所: 織田廣喜美術館 市民アトリエ

4. 公開非公開の別: 公開

5. 出 席 者: ※敬称略

(1)出席委員

会 長 緒方 泉

副会長 丸山 桃子

委 員 三木 一司

委 員 北富 真治

委 員 坂本瑠里子

委 員 川尻 司

(2)欠席委員

なし

(3)教育委員会

課長補佐(館長) 松浦 宇哲

文化推進係主査 有江 俊哉

(4)指定管理者 (株)図書館流通センター

統括責任者 下田 富美子

サブチーフ 木村 亜沙子

6. 傍 聴 人 数: 0人

7. 議題及び審議の内容

【議題】

(1) 令和6年度経過報告について

(2) 令和7年度事業計画について

(3) その他

【提出資料】

- (1) 令和6年度事業経過報告-----資料1
- (2) 美術館利用者推移-----資料2
- (3) 来訪統計-----資料3
- (4) アクションプラン進捗-----資料4
- (5) 令和7年度事業計画-----資料5

議題及び審議の内容

議題 1: 令和6年度経過報告について

指定管理者による説明(資料1)

事務局による説明(資料2、3、4)

質疑応答

- **委員:** 配布された資料を見ると、今年度の来館者数が例年に比べて大きく減少している。原因は何か。
- **会長:** 資料1に記載されている月別の利用者推移を見れば、令和4年から6年にかけてのデータが確認できる。例年、8月や9月は来館者数が多く、美術館にとって「稼ぎ時」であったが、今年度はその時期に十分な来館がなかったようだ。それが来館者数減少の大きな要因ではないかと考えている。その点について、事務局としてはどのように見ているのか。
- **指定管理者:** 8月、9月は夏の展覧会の時期であったが、広報の開始が遅れたことが一因と考えられる。広報活動自体は実施したものの、開始時期が遅かったため、十分な効果が得られなかった。結果として、期待していたほどの入館者数には至らなかった。
- **委員:** 広報の遅れも要因の一つかもしれないが、それだけではないと考える。展覧会の内容や、来館者が求めているものとのズレもあるのではないかと。令和4年度は2,000人を超える入館者があり、令和5年度も1,000人を超えていた。それに対して、今年度は大きく減少している。また、来館者の居住地に関するデータを見ると、市外からの来館者が8割、市内が2割であると報告されている。確かに広報が届かなかった可能性はあるが、それでも展覧会を楽しみにしている市外の方は一定数存在しているはずである。そう考えると、そもそも市外の人々の関心を引く内容ではなかったのではないかと、という点も検討すべきだろう。来館者数の落ち込みには複合的な要因がある可能性が高く、その因果関係を把握しておかないと、今後も同じような結果を招く恐れがある。
- **委員:** 一つ提案がある。私は自分の店舗に美術館のチラシを置いているが、今回の「富田

葉摘展」のチラシについても設置していた。来店された方や近隣の方から「こんな展示があったなんて知らなかった」という声を多く聞いた。私は地域の自治会の組長を務めており、回覧板を回す立場にある。そこに美術館のお知らせなどを差し込むことができれば、市内の住民にもより広く認知されると思う。織田廣喜美術館が地域の文化的インフラとして、常に市民の目に触れる存在であってほしい。可能であれば、チラシを回覧板に挟んでもらうという手法も検討していただきたい。

- **会長:** 委員は、美術館の展示情報などに関心はあるが、市民は日常的に美術館からの情報を頻繁に受け取っているという印象は受けない。情報を見ようという意識や行動の頻度は、それほど高くないように感じているのか。
- **委員:** 私自身もそうだが、美術館の情報を自ら積極的に取りに行くというよりは、たまたま目に入った時に「ああ、こういう展示があるのか」と気づくことが多い。美術館の情報を常にチェックしているのは、ごく一部の関心の高い人だけであると思う。しかし、多くの市民にとって、美術館は生活の中で常に意識されている存在ではない。だからこそ、回覧板にチラシなどを挟んで情報を届けることで、美術館の存在や展示情報に触れる機会が増え、結果として来館者の増加にもつながると考える。
- **会長:** 嘉麻市では現在、回覧板にチラシを1枚挟むなどの紙媒体による広報も行っているかもしれないが、いまだにネットよりも紙で情報を得たい、見たいという人のほうが多い可能性もある。各地区に1枚ずつでも配布し、回覧板で回すことは難しいのか。
- **事務局:** 委員からご指摘のあった回覧板についてだが、嘉麻市では現在、市の公式広報は全世帯に配布する形で行っており、紙媒体で情報を届ける手段としてはそちらを用いている。なお、美術館については広報紙内に専用のコーナーがあり、そちらで展示情報などを定期的に掲載している。また、LINEによる嘉麻市公式SNSも運用しており、そこでも指定管理者から提供された広報用の情報を発信している。登録者数の正確な把握はできていないが、デジタルでの広報も並行して行っている状況である。
- **会長:** この話題は毎回のように取り上げられているが、やはり「広報を通じてどのように情報を人々に伝えていくのか」という点が非常に重要である。したがって、新年度に向けて、この点についてしっかりと整理してほしい。
- **委員:** 数字だけを見ると、特別企画展の入館者数は非常に少ない。その原因は、企画内容そのものに問題があったのか、それとも興味を引く要素が足りなかったのかという点も検討すべきである。また、先ほどの他の委員の発言にもあったが、私の地区でも回覧板は回っていない。本来ならば、回覧板を活用した広報は有効であると思う。文化協会の事業を通じて、それは実感している。ただ、現在はそれが困難な状況にある。企画の立案は非常に難しいが、先日、文化協会の中でも「せっかく立派な美術館があるのに、もっと行政

が力を入れるべきではないか」「このままではもったいない」という意見が出ていた。もっと積極的に企画活動ができれば良いのではないかという声であった。もちろん、企画の難しさは承知しているが、来館者の興味を引く内容、そして誰をターゲットとするかによって、結果は大きく変わるのではないかと考えている。

- **会長**: 入館者の年齢層や居住地域、そして過去に好評を博した展示内容など、こうした情報を改めて整理する必要がある。その上で、展覧会の企画にも反映していくべきである。また、新たな来館者層の開拓という観点では、市内の住民の来館が少ないことは大きな課題である。市民が美術館から「距離を感じている」現状がある。それをどうやって引き寄せるかという点も、展示企画の内容に大きく関わってくる。令和7年度の事業計画に関して、後ほど説明があると思うが、これらの点をしっかりと課題として受け止め、検討していく必要がある。
- **委員**: 私自身も入館者数が思いのほか少なかったことに驚いている。実感としては、美術館のSNSをフォローしていることもあり、「こういう活動をしているのか」と感じる機会が増えており、以前よりも情報が見やすくなってきていると思っている。「行ってみたい」「行きたかった」と思うこともあったため、広報の効果は出ていると思っていた。しかし、実際の入館者数だけを見ると、その思いと結果が繋がっていないように感じ、驚いている。8月・9月の展覧会は「ささめやゆきさんと石川えりこさんの展覧会」だったと記憶しているが、個人的には非常に充実した、素晴らしい内容だったと思う。それにもかかわらず、なぜ入館者が少なかったのか、不思議に思っている。広報についても、以前より積極的に行われているという印象を受けていたため、なおさらである。また、我が地区でも回覧板は回っており、回覧板があれば確実に効果があると感じているが、実施が難しいのであれば、新聞への折り込みチラシなどは実施できないのだろうか。私自身「山田ブギウギまつり」の主催にも関わっており、1か月ほど前に1万枚の折り込みチラシを配布した結果、多くの来場者があった。こうした方法は一定の効果があると実感しており、新たな広報手段として検討すべきだと思う。
- **会長**: デジタルとアナログのバランスは難しい。社会全体がデジタル化に向かう中で、逆に人々がアナログ的な情報を求めている面もあるのではないかと感じている。
- **委員**: 「県展」の来館者数は毎年あまり大きく変動がなく安定している。一方で、8月・9月の企画展については、前回の委員会でも話が出たが、思ったほど集客がなかった。去年は「昆虫展」、その前は「ノンタン展」と、夏休みの時期には家族連れが多く訪れていた。特に「メカニックデザイナー展」では非常に多くの来館があり、大人向けの内容でありながらも人気を博していた。夏休みの時期には、昆虫や自由研究に関連する講演会などがあり、子どもたちにも関心を持ってもらえる内容が来館につながっていたと思う。以前の「石川え

りこ展」もメディアで取り上げられたり、私自身も作家にお会いする機会があった。ただ、あの展示はやや大人向けに偏った印象もあり、その点が子ども連れの来館者数に影響を与えた可能性もある。私たちにとっては、「ノンタン展」や「昆虫展」のような展示は、子どもと一緒にいこうという気持ちを喚起しやすく、家族内での声掛けにもつながる。そのため、どこにターゲットを置くかが非常に重要である。また、過去3年間の「県展」の入館者数が安定しているのも、そうしたターゲットや企画の一貫性が影響しているのではないかと考えられる。昨年度2月に開催された「ぐりとぐらの原画展」では、通常は入館者数が少ない2月・3月にもかかわらず、多くの来館者を記録した。本年度は「富田菜摘展」、その前には「旅の絵本パネル展」が行われ、展示室の空き期間を活用する形で開催されたが、こうした小規模な展示でも時期に応じて柔軟に企画を挟むことで、来館者数の底上げが期待できると感じている。例えば、アジア美術館で「北斗の拳の原画展」が開催されているが、こうした人気展示が終了した後に当館に巡回してくるような連携も考えられる。3年分のデータを横並びで見ることで、入館者が落ち込む時期が明確になる。そうした時期には、小規模でも工夫を凝らした展示を行うことが有効だと考える。8月・9月の集客は確かに難しいが、そこに柔軟な対策を講じる余地はある。

- **会長:** 先ほどの話にもあったが、夏は中学生・小学生といった子どもたちが動きやすい時期である。こうした忙しい子どもたちとその家族が共通のテーマを持って動くことは、ミュージアムにとって非常に重要である。そのため、家族全体で参加できるような題材を検討することで、これまでと違った展開が生まれる可能性がある。私自身も3人の子どもの育ててきた経験から、夏休みの自由研究の対応には特に苦労した。特に8月15日以降は親も一緒に取り組まざるを得ず、何かしら対応してくれる場所を求めて「いのちのたび博物館」などに行っていた。もちろん、美術館側が「これが良い」と考える企画もあるが、それとは別に、過去に好評だった“家族と一緒に訪れて話題にできるような内容”を再度見直すことも一つの方法であると考えている。
- **委員:** 教育アクションプランの進捗については、達成率の低い項目だけでなく、高い達成率の項目にも注目すべきである。中には200%、500%という成果を上げているものもあり、美術館の特色が表れていると評価できる。例えば、企画展の開催回数や講座の実施、中には学校を呼んでくるような取組などは達成率が低かったが、子ども向けの「アートキッズ」や大人向け講座などには成果が見られる。今後は中高生の参加を促すような取組みも検討すべきだろう。中高生は忙しく、参加が難しいのは理解しているが、その年代層を取り込む方法を考える必要がある。また、地域への周知に関しては、私の居住エリアでは回覧板は使用されず、公民館が毎月個別にポスティングしている。その中に美術館関連の情報を盛り込むことも可能だと考える。具体的には、「今月こんな催しがあります」

という形で周知する工夫ができるはずである。

- **事務局**: 現在、市からの広報は「広報嘉麻」に集約しており、全戸配布を原則として運用している。
- **委員**: 今年1年を通じて、学校として十分な貢献ができていないことを非常に申し訳なく感じている。特に展示室の入館者数にも関わるかもしれないが、「小学校児童画展」や「書き初め大会」の展示が「夢サイトかほ」で行われており、そのため、約400～500人分の数字が美術館の入館者数に反映されていない。「小学校児童画展」については、「夢サイトかほ」で作品審査を行っている。作品は一旦小学校で預かり、学校へ返却された後、県へ送られる。県から返却された作品を「嘉麻市小学校児童画展」として展示しているが、審査に適した広い会場が「夢サイトかほ」にあることから、展示も嘉穂小学校で行ってもらっている。結果として、織田廣喜美術館での展示は実現できなかった。書き初め展も今回は「サルビアパーク」で開催された。こうした他施設も利用希望者が多く、子どもたちの取り合いのような状況になっている可能性もある。また、碓井義務教育学校の例で恐縮だが、「障がい児者展」の見学予定日は大雨のため中止となり、美術館を訪れたのは3年生のみであった。アウトリーチについてもカリキュラムの都合で実現できなかった。ただし、来年度は学校内でもカリキュラムに組み込み、貢献できるよう努める予定である。ただ、すべての学校が同じ段階まで到達できていないのが現状であり、申し訳なく思っている。教育アクションプランにおいては、以下の項目で学校の貢献が必要であると認識している。美術館を活用した学校数、展示室入館者数、アウトリーチ実施回数。これらの達成に向け、さらなる協力が求められると感じている。
- **会長**: 事業報告書6ページに記載されている通り、嘉麻市内に残る民話を紙芝居化し、その作品を用いて語り継いでいくという取り組みについて、今後市内でのお披露目を進めていきたいという話があった。これに関連して、滋賀県甲賀市では、地域に伝わる民話を題材に、高齢者が「自分が小さい頃はこうだった」と語りながら町を歩き、民話の原点を再確認するという活動を行っている。その上で、民話を紙芝居としてまとめ、小学校や中学校へ持参し、子どもたちに見せるという取り組みを実施している。子どもたちは、民話を通じて自分の住む町への関心を深め、地域を再び歩いてみるといった行動にもつながっている。このように、単に紙芝居を制作・展示するにとどまらず、それをどのように次へつなげていくのか、その成果をどう活用していくかという視点が重要である。教育現場での活用も含め、パッケージとして授業に取り入れられる形を提示していくことが求められる。また、市民にとっても「この町にはこんな場所があり、こんな民話が残っている」と知ること、自分たちの住む町への誇りや関心を育むきっかけとなる。それは地域学習としても大変有意義であり、大きな成果をもたらす。したがって、この紙芝居事業は大切に扱っ

てほしい。なお、甲賀市の歴史民俗資料館を中心としたこのような取り組みは非常に優れており、今後の参考にさせていただけるとよいと考える。アクションプランについて触れると、数値的に突出している項目もあれば、やや残念な結果の項目も見られる。ただし、こうした数値を謙虚に受け止め、次年度に向けて改善に取り組むことが重要である。数値が明確に出ることには意味があり、それをもとにどのような解決策を講じていくかについては、これまでの実績も踏まえて丁寧に検討していったほしい。

議題2:令和7年度事業計画について

指定管理者による説明(資料5)

質疑応答

- **会長:**「オダビ展」は4月26日から開催予定だが、文化協会との連携や、ネット・SNSなどを活用してアーティストへの声かけは行っているのか。
- **指定管理者:**展示に参加いただく方々へは、個別に声かけを行っている。
- **会長:**展示の内容はすでに決まっているのか。
- **指定管理者:**内容は、ほぼ決定している。
- **会長:**小学校や中学校にも依頼して作品の出品をお願いしているのか。
- **指定管理者:**開催時期が4月であるため、学校からの出品は難しいと考えている。現在は幼稚園や保育園に声をかけている。
- **会長:**来年度の企画はいつ頃立てるのか。小中学生が多忙という点についても、美術部などの活動がある学校もあり、そういった生徒にとっては発表の場があることは非常に重要だ。あらかじめ相談しておけば、既存の作品の出品も可能だし、新たに展示に向けて制作する意欲も湧く。それはミュージアムとして非常に意義のあることだ。そうしたタイミングの見極めが重要である。
- **会長:**「柴田ケイコとくいしんぼう」は6月14日から8月31日までの開催予定だが、内容はどのようなものか。
- **指定管理者:**現在人気の絵本作家、柴田ケイコ氏の絵本原画展である。代表作に「パンどろぼう」や「しろくまシリーズ」などがあり、いずれも人気のある絵本である。複数の出版社から作品が出版されており、各出版社に依頼して原画を借用している。今回は8作品分の原画を展示予定である。例年は夏休み開始後に開催していたが、今回は夏休み前から始めることで、学校からの見学も受け入れられるようにしたいと考えている。
- **会長:**6月14日から始まるということで、広報はいつ頃から実施する予定か。
- **指定管理者:**広報は4月から開始している。

- **会長:**学校へも早めに情報を伝えることで、学校側も動きやすくなる。6月10日開始であれば、学期中の対応も可能だし、夏休みに向けた準備も取りやすくなる。情報提供のタイミングが大切だ。
- **指定管理者:**夏休みの宿題に関連した話だが、「アートラボ」というプログラムにおいて、夏休み期間中に宿題を終わらせようという事業を予定している。
- **会長:**「アートラボ」についても、夏休み前に学校にしっかり広報して、子どもたちに周知してほしい。非常に良い取り組みであり、保護者にとってもありがたいことである。
- **指定管理者:**「柴田ケイコとくいしんぼう」展以外には、まだ具体的な事業は決まっていないが、市内で行われる様々なイベントに美術館として参加を検討している。関連グッズもあるため、図書館と連携してイベントに出展し、美術館の紹介を行う予定である。
- **委員:**「オダビ展」について確認したい。今回が初めての試みであるが、公募は行われているのか。
- **指定管理者:**今回は公募を行っていない。
- **委員:**前回の協議会で出た意見が反映されている内容だと思う。私の学校には、鳥の写真をうまく撮る生徒がいるが、現在高校に進学し多忙な時期である。ただ、そうした才能ある若者に声をかけて、写真をパネル化して展示することができれば意義がある。また、折り紙が得意な生徒もおり、発表の場がないのが実情だ。机一つほどの小さなスペースでも募集すれば出品してくれる可能性がある。令和7年度の展示を参考にしつつ、来年度に向けた募集を同時進行する形も考えられる。たとえば中学校の美術部に関しては、「中文連(中学校文化連盟)」の作品をこの美術館で展示してきた経緯がある。それらの作品のうち、市内の子どもたちの作品を次年度まで取り置いておき、「オダビ展」と合わせて展示するという方法も可能ではないか。現在は作品を生徒に返却しており、学校には保管されていないが、こうした仕組みができれば、出展を希望する生徒もいるかもしれないし、各学校で埋もれている才能が見えてくるかもしれない。
- **委員:**夏休みに予定されている「アートラボ」についてだが、以前は夏休みに工作などの企画が多くあった。しかし現在では、夏休み前に学校に大量の作品募集が届く状況にあり、それを仕分けていくため、昔のように全員が工作を提出し、学校で展示するような体制ではなくなっている。そうした点の整理は必要だと感じる。ただ、こうしたイベントに参加したいという子どもたちは多くいると思う。
- **会長:**子どもたちがこの美術館で発表の場を持てるという認識が広まれば、丸テーブル1つ分のスペースで、当日限りのライブ折り紙教室のような企画も可能である。常に展示に立ち会う必要はないため、折り紙が得意な生徒に声をかければ、「半日だけ

なら」と参加してくれる可能性もある。要は人材の情報をいかに美術館が把握し、蓄積していけるかが鍵となる。そのうえで、どのように声をかけていくかが今後の課題である。丁寧なアプローチを通じて地域住民とのつながりが生まれ、「うちの子にこんな場を与えてくれてありがとう」という感謝の気持ちが育ち、結果として応援団の形成にもつながっていくだろう。

- **委員:**すでに出品者や作品の配置は決まっているのか。
- **指定管理者:**出展する団体は決定している。「オダビ展」も、その前の市民展もそうだが、春は多くの方が「まだ作品が完成していない」と話される。現在から制作を始め、後半に出品するという流れになっており、この時期は展示室が空いてしまう傾向がある。私たちが指定管理者となってからも同様の状況が続いており、この時期に誰かに展示室を使ってもらいたい、また発表の場を設けたいという思いがある。例えば、1人につき机1台と有孔ボード1枚を使い、皆で展示して展示室を活用してもらえれば思っていた。しかし、人材の確保が難航しており、現在は皆さまのご協力を仰ぎながら進めている。なお、子どもたちの作品が展示されれば、その家族や関係者が来館してくれるため、そうした人の流れを生む場としても機能していくだろう。
- **委員:**「オダビ展」は非常に良い企画だと感じている。私は現在、嘉麻市で地産地消を広める活動を行っているが、その目的は、地域の店や生産者の存在を知ってもらい、地元での消費を促進することだ。これを美術や芸術の分野に応用すれば、地元の芸術家やアーティストを発掘し、支援することにつながる。彼らが芸術を職業として継続できるように後押しすることで、美術・芸術を地域産業として捉える視点も生まれてくる。「オダビ展」がそうした動きのきっかけとなれば非常に意義深い。
- **会長:**美術館が「人づくりの場」であることを明確に打ち出していく意識が大切である。事業計画を見ても、一つひとつの取り組みには真剣さを感じられるが、「点」として終わらせず、織田廣喜美術館のミッションの中心には「人づくり」があることを自覚しなければならない。また、発表の場としての機能を果たすことで、子どもたちの達成感やモチベーションの向上にもつながる。それはすなわち「生きる力」を育むことであり、そうした視点を発信していくことで、地域住民からの理解や共感が得られるようになる。現在、美術館の活動は十分に行われているが、それが地域住民には伝わっていないのが現状である。何が伝わっていないのかといえば、それは「キーワード」だ。「何をしているミュージアムなのか」と問われたとき、「人づくりのミュージアム」であると明確に答えられるようにする必要がある。そのように認識されることで、ミュージアムへの期待は高まり、地域の中で人を大切に作る施設としての価値も向上する。現在、美術館の利用者のうち市民が2割に留まっているのは、地域住民にとって大切な場所として認

識されていないからかもしれない。したがって、「人づくりの場としてのミュージアム」を再構築することが、これからの美術館運営において非常に重要である。美術館は今、分岐点に立っている。この機会に市民の気持ちを掴むことが、今後の成功を左右する。「オダビ展」は、そうした視点からも非常に良い取り組みである。多くの委員から出された意見をうまく取り入れながら、「人づくり」を柱とした運営を進めていくべきである。

- **委員:** 2 月中旬に県立美術館で中学生の美術作品展が開催されているが、会期終了後、学校側と協力し、その作品を織田廣喜美術館で年度末に再展示することは可能だろうか。また、以前の「県展」では太宰府高校の学生作品が非常に素晴らしかった。「県展」に出品された高校生の作品についても、選外作品を含めて借用できないだろうか。無理に新たな制作を依頼するのではなく、既に制作された作品を展示することが望ましいと思う。また、「柴田ケイコ展」については、絵本が人気で書店でも平積みされているのを見かけた。都市圏の大手書店にポスターやチラシを送付するのも一つの方法だと感じる。
- **会長:** 子どもの作品は基本的に家庭に戻されるが、学校側に預かってもらえれば保管して展示に活用できるかもしれない。地元の美術館に自分の作品が展示されるというのは、子どもたちにとっても喜びとなるはずだ。また、太宰府高校の話があったが、同校の芸術科のように、筑陽高校にはデザイン科、九州産業大学付属九州高校には造形芸術科がある。そうした高校生の作品を地元の子どもたちに見せるのも良い取り組みだ。卒業制作展は県立美術館などで開催されているが、それとは別に、本美術館での展示を通じて子どもたちが美術に興味を持ち、進路として考えるようになるかもしれない。学校側も貸し出しには協力的であると思う。高校説明会を開催しなくても、高校生の作品を見る機会を提供することで、進路の一つとして自然に意識される可能性もある。委員の皆さんの発言を聞いて、多くのアイデアの種があることを改めて実感した。それらを一つひとつつなげていくことで、新たな可能性が生まれると考えている。
- **委員:** 令和7年度末に何か企画展示は予定されているのか。「富田菜摘展」の際に社内コレクションの展示があったが、同様に他のコレクションを使った展示も可能なのだろうか。
- **指定管理者:** 当社は出版社との繋がりがあり、原画を預かっている作品もある。これらを活用し、「アートキッズ展」と連動する形で展示企画を検討中である。
- **委員:** 5月10日に山田地区で、障がい児と文化協会が連携して「青空フェスタ」を開催する予定である。図書館のおはなし会もプログラムに含まれているが、美術館としても広報活動を連携して行えばよいのではないかと。人が集まる場で広報を行うことが効果

的だ。

- **会長:**「ブギウギまつり」や「青空フェスタ」など、人が集まる場の情報をうまく収集し、そこに出向くことで、その場にいる人々の一割でも関心を持ってもらえれば、集客に繋がる。SNSやメディアによる情報発信は行っているが、それだけでは人々の関心を十分に得られていないのが現状だ。今日の意見を聞き、改めてアナログな広報の重要性を感じた。「青空フェスタ」で図書館が読み聞かせを行うのであれば、「柴田ケイコ」の絵本もリストに加えてもらおうと良い。また、当日はその場でチラシを配布するのも効果的だ。
- **委員:**「青空フェスタ」や「ブギウギまつり」には毎年図書館が参加している。これに美術館も加わってくれと良い。「柴田ケイコ」さんの絵本は非常に人気があり、今年1月に福岡市で開催された展示でも好評であった。先ほど報告された入館者数の課題についても、「柴田ケイコ展」の広報活動を通じて集客の改善が期待できる。
- **会長:**織田廣喜美術館は、市民の心身の健康のために存在しているという認識を、しっかりと持ってもらうなければならない。現代の子どもたちは生きづらさを感じていたり、学校との関係が難しかったりする。そのような状況を、美術館の持つ力や感性の刺激によって回復に導ける可能性がある。織田廣喜美術館が市民とどう繋がっていくのかを常に意識しながら、すべての事業を進めてほしい。今日のように、委員の皆さんからは本当に多くの素晴らしい情報をいただいている。指定管理者の皆さんは、ぜひ遠慮せずに我々委員に声をかけてほしい。「この日がいい」「ここでやるといい」と、具体的にアドバイスできる人たちはたくさんいる。私たちが存分に活用して、市民にとってより良いプログラムを提供して欲しいと願っている。

議題 3:その他

なし。

閉会

この会議録は、緒方会長に確認していただきました。